日はまた昇る

5家族 心の復興

井筒さん一家（山田）③

仮設住宅での生活がスタートした井筒さん一家。「わが家をどこに再建できるのか」と不安を募らせる（左から）力男さん、誠子さん、勝哉さん＝山田町山田

仮設入り新生活模索

7月9日。山田町八幡町の町中央コミュニティーセンターで避難生活を送っていた井筒力男さん（61）の携帯電話が鳴った。

「見つかった骨が息子さんであると、ほぼ確定しました」。東日本大震災で行方不明となっていた次男誠二さん＝当時（28）＝の発見を知らせる警察からの電話。

力男さんと妻誠子さん（59）は、遺体の身元特定のため、DNAを提供しており、鑑定の結果、発見された骨は誠二さんのものであると分かった。

遺骨は焼け落ちた自宅跡近くのがれきの下から見つかった。二つの箱に分けて収められ、それぞれの箱に骨が発見された「3月25、26日」「5月5、6日」の日付が記されていた。

火勢が強かったのだろうか、残った骨はわずかで両手に収まるほど。衣服などの遺留品はなかった。力男さんは「見つかって安心したところもある。海の方に行ったと思っていたが、流れて家のそばまできたのかなあ」と視線を落とした。

震災後、息子を捜し続けた4カ月間。NPO法人メンバーと共に山田湾で遺体の捜索活動を行い、合間には遺体安置所も歩いて回った。そんな日々を振り返るように、しばらく沈黙した後、「見つかった…。そう、見つかったよ」と声を絞り出した。

息子は戻ってきたが、海上捜索は続ける力男さん。「不明者を『見つけたい』と思う気持ちは誰でも一緒だと思うから」とほぼ毎日、海へ繰り出す。

誠二さん発見の知らせから1週間後の16日。家族は4カ月間の避難所生活を終え、同町山田の仮設住宅に移り住んだ。

漁業を営む井筒さん一家は、これまで自宅も避難所も海から歩いて5分ほどの場所だった。「新居」は車で10分ほどの内陸部。どこか不便を感じる。

しかし、5月の第1回抽選に漏れてから待ちわびた入居だ。何かと気遣いが多い避難所生活に比べ、長男勝哉さん（30）は「まあ、当たったからいいかなと思うしかない」と、ようやく訪れた家族だけの時間を大切にしようと思う。

仮設住宅には、あらかじめテレビやエアコン、冷蔵庫などが備え付けられている。それでも食器類や収納道具などは購入しなければならず、夏物の衣料品も必要だ。出費がかさむ。

4畳半二間の仮設住宅は手狭。誠子さんは「最初は避難所から出たい、出たいとばかり考えていたが、仮設住宅に入れば、今度はわが家がほしいと思う」と本音を打ち明ける。

しかし、いまだに浸水地域の住居建築について具体的な方針は示されていない。「前の場所に家を建てられるのか、早く回答がほしい。建てられないのなら、次の場所を考えるのに…」。新たな生活に焦りものぞく。

（5家族の物語を週替わりで火曜日に掲載します）

井筒力男さん一家の動き　山田町でカキ養殖業を営む井筒力男さんは山田漁港でカキむき作業中に被災。一緒にいた妻誠子さん、長男勝哉さんと共に逃げたが、次男誠二さんは津波に巻き込まれた。遺骨が発見され、震災から4カ月後の7月11日に死亡届を提出した。一家は同町八幡町の避難所に身を寄せた後、16日に同町山田の仮設住宅に入居した。

いわて 東日本大震災

～被災地からのメッセージ～

津波てんでんこ

題字・山下文男さん

にぎわう商店街願い

宮古市大通2丁目　自営業　大久保久枝さん（44）

いつもの揺れじゃないと思って、田老の自宅から義母と長女を連れて三陸鉄道田老駅に歩いて避難した。小さいころから学校で避難訓練を受けていて「車で逃げちゃ駄目だ」と言い聞かされていた。訓練のおかげで助かった。

駅のホームから津波を見た。海水が一気に押し寄せてきて、気付いたら街が水で覆われていた。

震えて、立ち尽くして、抱き合って覚悟を決めたけど、たまたま水が止まって生き残った。自然の力には逆らえない。

夫＝秀司さん（43）＝と営むラーメン店「大久保」は無事だったので、営業時間を短縮して4月10日に再開した。

皆さんに食事の場所を提供したいと思い、早く店を開けたかったけれど、水、電気、ガスの復旧に時間がかかった。

思いやりのある皆さんに助けられたので恩返しの気持ち。この夏のうちに通常の営業時間に戻したい。

漁業関係の仕事が元通りになって、商店街もにぎやかになってほしい。

～～～～～～～～～

ラーメン店「大久保」の大久保久枝さん（左）と夫の秀司さん

大船渡に住み続ける

大船渡市の大船渡中校庭の仮設住宅で生活　菊池　吉和さん（67）

仮設住宅に入り約2カ月になるが、いまだに震災直後の緊張感が抜けない。行事を通じて近所の人たちと交流するのが楽しみだったので、地域がばらばらになるのは残念だ。大船渡に来て20年ほどになる。人柄のいい人が多く、雰囲気が自分に合っている。街はだいぶ変わってしまったが、今後もずっとこの街で暮らしていく。

～被災地へのメッセージ～

時間たっても支援を

盛岡市開運橋通　和田　雄斗君（桜城小5年）

震災発生当初、津波のニュースを新聞で知った。停電で暗い中、家や車が流される様子を想像すると、とても怖かった。もし僕がそこに一人でいたなら、逃げながら泣いてしまっていただろう。震災からだいぶ時間がたって、ボランティアや支援が少なくなっている。僕も募金など生活の中でできることをやっていく。

被災者癒やし長く

葛巻「森のそば屋」

心一つに　「内陸」から支える

震災直後から継続

炊き出しやホタル観賞

接客する「森のそば屋」の高家章子代表（右）。被災者の心を癒やそうとさまざまな支援活動に取り組んでいる

葛巻町江刈の森のそば屋（高家章子代表）は、東日本大震災で被災した沿岸住民を招いたホタル観賞会やそばの炊き出し支援など、震災直後からさまざまな支援活動に取り組んでいる。「私たちにできることをやろう」。地域のお年寄りが打つそばの味と真心を込めたもてなしが、被災者の心を癒やしている。

（・）

「あっ光った」「線香花火みたい」。町中心部から6キロほど離れた同町江刈川地区。街灯の光が届かない森の中で、ヒメボタルが幻想的な光を放つ。被災地から一時避難する親子連れが興奮気味に声を弾ませた。

同店が今月4日に開いたホタル観賞会。山田町や宮城県から葛巻町内に避難してきた13人がそばを味わい、暗闇に次々と浮かび上がる光の競演に顔をほころばせた。

震災で甚大な被害を受けた山田町北浜町から一時避難する福士隆さん（58）は「子どものころに戻ったよう。ホタルを見て心がホッとした」と表情を緩め、妻寿子さん（53）も「葛巻の人はみんな親切。見ず知らずの土地で声を掛けてもらい、本当にありがたい」と声を詰まらせた。

水車で粉をひき地域住民と、餅や団子を加工する姉妹店「みち草の駅」は停電の影響が小さく、震災発生翌日から支援に動きだした。

ろうそくや懐中電灯の明かりを頼りに作った餅や団子を、物資不足に陥っていた盛岡市や二戸市に出張販売。町内の福祉施設にはそばを振る舞った。3月下旬からは釜石市、宮古市、山田町など沿岸部の避難所にそば1160食、田楽もち750本を届けた。

高家代表は「森のそば屋は開店から19年。その恩返しのつもりで、私たちにできることをやろうと活動している」と継続的な被災地支援を誓う。

（随時掲載します）

「卓球気仙」復活へ拠点

陸前高田　有志建設の会館完成

陸前高田市の有志が整備した「復興米崎卓球会館」の落成式は18日、同市米崎町字脇の沢の現地で行われた。運動環境が整わない被災地で卓球の拠点として活用しようと、地元関係者が建設した。

地元の有志が建設した復興米崎卓球会館＝陸前高田市

建設推進委員会の会長を務める大和田剛史米崎中卓球部OB会長は「気仙地区の卓球愛好者に利用してほしい」とあいさつし、戸羽太市長が「復興への大きな原動力になる」と祝辞を述べた。

卓球台などの備品を寄贈した日本卓球（東京都千代田区）の北岡功社長も駆け付け「末永くバックアップしたい」と宣言。会館は木造平屋で床面積124平方メートル。卓球台4台を同時にプレーできる。

校舎、体育館が使えない米崎中卓球部の佐々木唯羽君（1年）は「練習しやすくなる。県大会へ向かって頑張りたい」と完成を喜んだ。

23、24の両日には同会館と米崎小で、女子日本代表の近藤欽司前監督らが子どもたちの卓球指導を行う「卓球フェスティバル」が開かれる。

もぐらんぴあの施設内からがれきを運び出す学習院大の学生たち＝久慈市

学習院大生　奉仕に汗

久慈・もぐらんぴあ　がれき撤去し清掃

久慈市侍浜町の地下水族科学館もぐらんぴあで18日、学習院大（東京都豊島区）の学生有志63人ががれき撤去や清掃作業を行った。

学生たちは夏休みを利用して訪問。自家発電機を利用した小さな明かりの下、床面の泥をスコップですくい上げたり、水で流すなどした。

竹辺倫彦さん（法学部1年）は「泥の中に（被災前に使われていた）チラシが混じっていたりして津波の怖さを感じた。少しでも復旧の力になりたい」と力を込め、石井祥太さん（理学部3年）は「待っている人たちのため、時間がかかっても再開に向けて頑張ってほしい」と願った。

学生たちは23日まで6泊7日の日程で滞在。久慈市内で桜を植樹、野田村や宮古市田老で炊き出しを行う。

被災を免れた水槽などを使って久慈駅前に8月、まちなか水族館がオープンするが、もぐらんぴあの復旧めどは立っていない。

復興祈る迫力の舞

宮崎から高千穂神楽

槌納大奉とに石釜神社

鎮魂と復興の祈りを込めて披露された高千穂神楽＝釜石市

～～～～～～～～～

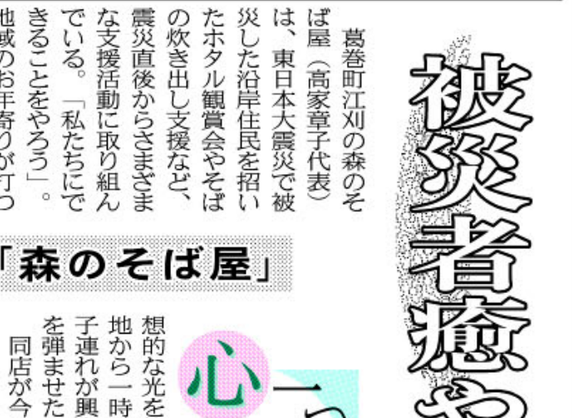
無形民俗文化財に指定されている高千穂神楽を奉納した。被災者は迫力ある舞に見入り、復興への思いを強くした。

奉納は釜石市浜町の尾崎神社と大槌町上町の小鎚神社で行われた。高千穂神楽は秋の実りへの感謝と恵み多き春の到来を願い夜を徹して奉納する夜神楽。今回は両神社で計6番の演目を披露した。

尾崎神社では「神降し」を披露し、地域住民ら約50人を魅了。同市浜町の山下正さん（62）は「テレビで見たことはあったが、実際に見ると迫力が違った」と驚き、尾崎神社の佐々木裕基宮司は「はるばる来ていただき感激。復興に向けて機運が高まると思う」と感謝した。

後藤宮司は「伝統や文化を復興の力にして、平和で美しい岩手にしてほしい」と願いを込めた。

宮崎県高千穂町の三田井地区神楽保存会（俵勲会長）と高千穂神社（後藤俊彦宮司）は18日、釜石市と大槌町の神社で、国の重要



犠牲者を悼んで焼香し、手を合わせる参列者＝宮古市重茂

重茂地区犠牲者50人の冥福祈る

宮古で合同葬

宮古市重茂地区の東日本大震災合同葬儀・慰霊祭は18日、同市重茂の重茂漁協で行われ、参列者は犠牲になった50人の冥福を祈った。

遺族ら400人以上が参列。同漁協の伊藤隆一組合長が「多くの人が津波の犠牲になった。供養の碑を建立し、教訓を基に水産の街をつくり上げる。重茂の繁栄を天国から見守ってください」と弔辞を述べた。

参列者は位牌が並べられた祭壇に向かって焼香し、静かに手を合わせた。同市音部の坂本吉三さん（54）は、兄幸一さん＝当時（60）＝が行方不明。「何とも言えない気持ち。これが一つの区切りと思って、これからの生活をやっていかなければいけない」と神妙に語った。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。